

〔世諺問答〕十二月 問て云、節分に、せうのもちゐとてくひ侍るは、なにのゆへぞや、答、この事さ  
らに去りがたし、また五條天神に侍るよし申、彼天神いつよりあまくだりまします神とも見え  
ず、儀式にもものせぬ神なれば、さらにしりがたし、此もちゐをくへば、物に勝といふくのう侍るよ  
し、申つたへたるばかりなり、

問て云、節分におけらをたくは、何のゆへぞや、答、白朮は風氣をさる薬にて侍るうへ、餘薫あし  
きゆへに、疫疾の神の夜行する夜なれば、是をたきておそれしめんがためにて侍る、

〔日次紀事 十二月〕節分の夜は、五條の天神にまいり、餅白朮をうけてかへることあり、五條天神は  
少彦名命にて、天下の疫癘を守らんとちかひ給ふ神なるゆへ、一年中の疫癘をいのらんだめに  
まいる事なり、白朮は濕はらふ薬なれば、風濕疫癘をのぞくの心にて、神前にてうけて歸り、火に  
てたくなり、

〔都名所圖會 二〕五條天神宮 祭は九月十日、又節分には、白朮小餅寶船を禁裏に上る、小餅料は、天

義輝公の母公慶壽院より御吹舉ありて賜る、それより今に至り、公務の沙汰とし  
て、年々其料を賜ふ、此夜諸人群參して厄難除滅を祈り、三種の神物をうくるなり、

〔東都歳事記 十二月〕節分立春の前日也 下谷五條天神宮神事酉の刻追難あり、白朮餅を出す、これを服

節分例

〔看聞日記〕應永二十四年正月十日、節分也、

〔御湯殿の上の日記〕慶長九年正月七日、せつぶんの御いわひ、まも、まめにて一こん參る、まめよは  
うへくいにうちそめまいられて、いつものごとく、長はしうちまいらせられ、竹内よりついなか  
う參りて、御かきあらせらる、べちでんにながはしへならず、御さか月三こん參る、女中御  
ばんしゆ御とをりあり、十二月十八日、せつぶんの御さか月、まも、まめにて一こん參る、まめよ  
はうへむかせられ候て、御所にうちそめまいらせられて、そうへは、長はしうちまいらせ候、竹田